KSKP サロン・あべの NO.59

天王寺動物園 再発見

さらりとした風が肌に快い平成三年四月二〇日（土）午後一時～四時、四月の出会いとして天王寺動物園を見学した。

天王寺公園の花時計前に集合して、色様々な花々で美しく彩られた公園を斜めに横切りスロープを登り下りして行くと天王寺美術館の前に出た。その正面に動物園の入口に続くしゃれたプロムナードが広がる。直進してラセン状のスロープを下った所に正面入口がある。中に入って団体では行動しにくく見にくかろうと、自由行動に・・・

アシカには、二種類の性格があるらしい。昼寝をしているのんびりやさんと、すばしこく泳ぎまわる行動派と。

北極熊の親子は、白い岩肌の中でまぶしくじゃれあっていた。

長い鼻を愛想よくふり、あちらこちらと動きまわっているゾウは、飛んで来るお菓子を鼻で受けたり、拾ったり。その姿は懐かしく親しみがある。が、やっぱりデカイ。

本日のお目当ては、コアラ。しんと静まった建物の中の通路を行くと、片側のガラスケースの中にユーカリの木が何本か立っている。「あそこ、あの木の葉の陰…」の声にやっと黒い鼻先を見つける。しっかりと木にしがみついて夢の中。外に出るとそこには、日向ボッコをしている一頭のコアラがいた。それも木にしがみつき夢うつつ。色といい、形といい、ぬいぐるみそっくりだが、愛想がない。

夜行性のこうもりや、ネズミが居る建物の中は真っ暗。動いてくれないと何が何やら…「ガラス面をたたかないで下さい」という字がやたら大きく見えた。

あちらこちらと、見て回っておつかれさまでした。

参加（二三名）の方々、動物園再発見の出会いはいかがでした？

一九九一年六月十五日発行（毎日発行）KSKP通巻一六五八号一九八四年八月二〇日第三種郵便認可
発行人＝関西障害者定期刊行物協会＝大阪市城東区中浜2－10－13緑橋ビル419 1F・アド企画気付

久しぶりの動物園 いかゞでしたか!!・・・

幼き日の憧れ…動物園

南 光 仁 子

二月半ばに風邪をひき体調を随分と崩してしまった。それ以来、春というのに太陽の下で一日を過す事など全く無い二ヶ月。

そんな時、四月の「サロン・あべの」の集いは、天王寺公園と動物園だった。幸いにもその日は朝から快晴。少し肌寒い感じはあったけれど、私は夫について朝から出掛ける事になった。太陽に当る事で健康が戻ってくれればという期待と、幼い頃にはどれ程行ってみたくても、行く事が叶えられなかった動物園。

私が生まれて初めて動物園に行ったのは、もう十六年ぐらいも前の事。もうかなりの年齢だったが本とかテレビでしか見た事のなかった動物を目の前にして大変感動した思い出がある。今の年齢になるとなかなか自分自身進んで動物園に行く気にならないものだが、なぜか幼い頃の憧れを今現実にしていると言う、胸のトキメキを感じてしまう。

「サロン・あべの」の楽しい人たちと過していると時間のたつのを忘れる程で、コアラからライオンに至るまで欲ばって見てまわった一日。でも、「感想は?」ってことになると、何となく元気がない動物が檻に入れられて、エサを与えられ生きさせてもらっている、そんな感じがしてとても残念。でももしかしたら、私たちもこの動物たちとあまり変らないかもー。ふと、そんな気持ちも心をかすめたが、それはともかく、何年か前には元気な友達としか行くことができなかった所にでもみんなと気軽に出掛ける事が、昔を思うと今は「本当に幸福になれたナァ」と思っている。

さて、この日私は欲ばって太陽をいっぱい呼吸して健康を取り戻そうと願ったのに、まるで結果は逆で真黒に日焼けをしてしまい病院へ行く始末。もう年齢には勝てないのが身に染みて分かったが、それでも久しぶりに楽しい一日だった。

アッシー君

石 田 律

いろんな後遺症の複合と加齢が重なって歩くのがしんどい。カバを見に行く一日のためのアッシー君がほしい。それで、思いついたのが電動車イスのリース。メディカルサービスへ聞いてみたら、貸し出し単位は一カ月、料金は月ウン万円に搬入・出の運搬賃ウン万円のおまけつき。そんなアホな、なんぼなんでもカバを見に行くのにウン万円とは。ヤ〜メた。この話を聞いたわ

れらがTさん、心当りを必死で探してくれた。お陰で、バカ高いリース料を払わずにカバ見物出来た。

ありがとう、Tさん、いゝ日でした。

天王寺動物園行きに参加して

松谷裕子

動物園へ行くのは、何年ぶりだろうか？と考える。子供の頃に行ったきりと違うかな？と思うぐらい、なつかしく童心に帰って楽しい半日でした。

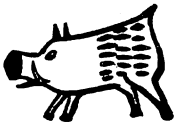
自由行動の中、時々見かけるサロンの人達の明るい顔、楽しそうにしておられる。そんな光景を見かけると、こちらもなんとなく楽しい気分にさせられます。

でも、少し気になる事を申しますと…何度か行事に参加させていただいます私は、ありがたい事に何んの不自由もない人間です。サロンのメンバーの方達の車イスに乗りながらも、明るく楽しく生きる姿に、すばらしいと前々から感じ、参加した時には私でもなにか力になれたらと思って行かせてもらっているのです。が、実際、まだ親しむ程の回数もないのでしょうが、気をつかわれたり、遠慮されたりします。

車イスを後ろから押すのは、そんなに力は必要ないのに〃しんどいのでは〃とか〃私は、重たいので…〃と言われると〃私は元気なんですよ〃と叫びたくなります。

これからは、お気軽によろしく。又、機会があれば、参加させていただきます。

皆さん頑張って下さい。



「動物園」様々な想い抱いて

冨田慶子

動物園へ行く機会は、人生の内で三～四回とある記事で読みました。親に連れられて行く子供の時、恋人と行く青春の頃、親になって子供を連れて行く時等だそうです。

私は、子供の頃の記憶はありますが、子供を連れて行った思い出はありません。もうその頃は、園内を歩いて回れる自信がなかったのです。そして、数年前に天王寺博が開催された時も、人出と広さに気遅れがして観には行けませんでした。でも、美しく化粧なおしをされた天王寺公園の前を通過する度、園内を観てみたいと思っていました。

そんな想いが今回のサロンの集いで実現しました。心配した天候は爽やかな風が吹き、ピクニック日和。JR阪和線鶴ヶ丘駅から天王寺駅へ電動車イスに乗って行きました。一人でこのようにして出かけたのは初めてのことですが、以前に二回知人に伴われて経験済みなので、不安は小さなものでした。が、天王寺駅を出て公園方向へ行こうとしましたが、五～六センチの段差があったり、柵があったりして、ウロウロしたあげくタクシー乗り場の進入路を逆走してやっとの思いで渡りました。帰りは、行けないと思った柵を上手にクネクネと通り過ぎられましたが、段差は上れずお手伝い

をお願いしました。動物園もさることながら一人で出ていく事も大きな課題ですので、今回の参加は私にとって清水の舞台でした。

天王寺公園内は、中央の噴水が軽やかに風と戯れ、色鮮やかな花々に囲まれた通路には家族連れ、若いカップル達が賑っていて、昔の面影はまるでなく「ヒロ・ヤマガタ」の絵のような光景に圧倒されました。

天王寺動物園再発見

動物園内では、楽しみながら各動物を観て回ったのですが、どれも何時も観ている動物のように思えて、「あれっ、これは小さい。これは大きい」という感想しか出てこず、これはテレビの観過ぎかもしれないと想いました。そんな中で、印象に残ったのが〃カワセミ〃です。最初は何人かの人達と一緒に観て回っていましたが、段々と離ればなれになって見終る頃には、Iさんと二人きりになっていました。「もう出口に行きましょうか」と鳥類舎の前を通りかかった時、カワセミが白いネズミを丸飲みしていました。カワセミは魚を食べる鳥とばかり想っていましたのでビッリしました。それにピンク色した細い尻尾がゆれながら吸い込まれて行く様にゾッとしました。「もう夕食時間になったのかしら」と言ったもののカワセミのイメージが変ってしまいました。

今回、電動車イスで初参加して体は楽でしたが、電気が切れないかと気がかりで、時間がとても長く感じました。動物園内では手押しの車イスは、貸し出されますが、電動車イス等は無いようです。花博で使用されていた電動車イス等はどうなったのかと思います。各公園や施設にあの時の電動車イスが配備されていたら、もっと外出しやすくなるのではないでしょうか。今回の参加者に、家から電動で行くには心配なのでと、リフト付きタクシーで公園まで来られた方がおられました。私も家に帰り着くまで、シンデレラの気持ちを味わいましたが、自信も付いた一日となりました。

春の気分で考えてみれば

旭　純子

最近、サロンにはご無沙汰していたのですが、四月の天王寺動物園へ参加出来、本当に久しぶりに青空の下で、のんびりと過すことが出来ました。

車イスの参加者の多くが介護を必要としない方々ばかりで、「介護者が不足では…」との当初の心配もどこへやら、私自身も十数年ぶりの動物園に、あちらこちらと見てまわって楽しかったです。

楽しみにしていたコアラは、ずっと昼寝中で木の陰にかくれて丸くなっているのを見ただけでしたが、「主食であるユーカリは栄養が少ないので、カロリー消費を最小にするために一日の⅔以上を寝て過す」のだそうで、なかなか勉強になりました。

他にも、ガラス張りのおりの中で同じコースを同じペースで歩き回っているレッサパンダや、いつまでも置物みたいに動かない象さんなど、多くの動物に出会いました。

中でも一番お気に入りで、おりの前から離れられなかったのは、オランウータンでした。長いこと、ひとりで張りついたみたいにして見ていたのですが、途中ソフトクリームのプラスチックのふたを口に出し入れしている姿を見て、以前亀井一成さんの話にあった中身を思い出して、少し悲しい気分になりました。そのお話は「原因不明で死んでしまったカバやサルを解剖したら胃や腸から、見学者がおもしろ半分に与えたと思われるゴムのボールや空缶などが出てきた」というような中身でした。

オランウータン君はそのふたを飲みこんだりしないで、ただ遊んでいただけのようでしたが…。

食事の時間がきて扉の向こう側に飼育員の気配を感じるとオランウータン夫妻は遊ぶのをやめて、扉のあくのを待っているようでした。そして、扉があくと「待ってました」とばかりにオスが上っていき、ひとりで入らずに後ろ手に右手を出して、メスが上って来るのを待っているのです。すり寄ったメスが手をつなぐと夫婦はスーッと扉の中へと吸い込まれていきました。思わず「わぁー」と声があがって、しばらくとてもほのぼのとした気分になっていました。「人間は、進化したサルである」と云うけれど、進化の途中でそういう本能的なさりげない思いやりをどこかへ置き忘れてしまったのでは…、などと思ってしまいました。

そう思うとおりの中の動物を見て楽しんでいる自分にも〝何か〟どこかへ置き忘れてきたものがあるように思えてなりませんでした。

考えてみれば春の一日、サロンに参加したとはいうものの、結局自由行動ばかりで参加者間の交流が十分にできなかったという面もあり、外出プランの企画としては、あれで良かったのだろうか…と、何となくふにおちない気分にもなりました。

次回からは、交流が出来るような外出を企画する必要もありそうですね。

ナンペイの

ひとこと&ふたこと ⑨

天王寺公園ぶらり

四月の「サロン・あべの」の出会いは、天王寺公園と動物園の散策。

ところでJRの天王寺駅から公園や動物園を通り抜け、通天閣を中心とした新世界へ行き着くあたりに私は思い出を沢山もっ

ている。

というのは私が二年前まで勤めていて、今でもこの「サロン紙」を印刷しているセルフ社が誕生したのが、十五年以上も昔のことになるが新世界も通り抜けたあたりの文化住宅の一角だった。

まだ学生だったが、その当時からセルフ社にかかわっていた私にとってみれば、今こんなにのんびり散策している天王寺公園や通天閣の界隈も、その頃は天王寺駅からセルフ社への通い慣れたいわば通勤路だった。今から思えば、よくもまぁあれ程の長い距離をトコトコ毎日毎日通ったものだ。やはり若かったから出来たことなのかな。

そんなことも思いながらゆっくり過ごした一日だったが、通勤の道にしていた頃からみれば、天王寺公園も随分様子が変わり「美しく変身」したのは良いのだけれど、如何にも人工的に造られた公園というのがどうしても感じられて、なにかしっくりこない。おまけに自由に通り抜けが出来なくなったばかりか、下手をすると開園時間をオーバーして出口が締まり閉じ込められてしまうというヒゲキまで起きる。

夜遅く仕事を終わって、暗い公園の中の坂道を息を切らせて登り帰り道を急いだ、そんな思い出がある者にとってはやはり少し淋しい気がする。

「サロン・あべの」のお陰で、春の一日を楽しく過ごすことが出来たが、以前の「土の匂いのする天王寺公園」を懐かしく思い出したひとときでもあった。

南光龍平

ました

平成二年度〈サロン・あべの〉毎月の出会い

五周年目を迎えた〈サロン・あべの〉は、より多くの方々と豊かな出会いを体験したいと、毎月様々な出会いを開き、皆様と共に楽しんでまいりました。

今、ふりかえって思い出していただける出会いは、どれくらいあるでしょうか・・・。

月日曜日	場所	内容
四・二一・土	大阪市立科学館	「オムニマックスとプラレタリウム」観賞、リフトバス利用する

1990年こんな事あり

五・十九・土	研修室	「ビューローの役割と活動」（V集いと共催）パネラー：竹村安子氏
六・十六・土	研修室	「親離れ子離れ私の自立」パネラー：川島雅恵氏
七・二一・土	研修室	「親離れ子離れ親の立場から」パネラー：今井清行氏
八・十九・日	工芸高校グランド内	「あべのカーニバル・なんでも市」にバザー店を出す
八・十九・日		〈サロン・あべのV五周年記念誌（サロン紙五〇号）発行する
九・二二・土	研修室	「スポーツって、何？」パネラー：身障スポーツセンター森島勉氏
十・二〇・土	研修室	「盲導犬ケリアの思い出」パネラー：大島功氏
十・二五・木	森の宮青少年会館	〈サロン・あべのV紙第十八回福祉広報紙コンクール「優良賞」受賞
十一・十七・土	研修室	「たのしい折紙」指導：今村明子氏・折紙ボランティアグループ
十一・二七・火		大阪市ボランティア活動振興基金助成金交付の通知来る
十二・一・土	研修室	「とてもハッピーなクリスマス」ゲスト：赤とんぼコーラス
一・十九・土	あべの・KYK	「今年もよろしく新年会」トンカツ料理食べながらの親睦会
二・十六・土	研修室	「サロンの五年、これからのサロン」を参加者に聞く
三・十六・土	研修室	ビデオ「これから…」を観て。パネラー：永広和人・浜本浩喜氏

＊研修室＝育徳コミュニティーセンター二階研修室

Volunteer Center

プロローグ

旭さんの「DEAF MUTE」の後を受けて卒論をもとにした連載を依頼されて困ってしまった。もう五年も前のものであるし、だいたい人に紹介できるようなものとは到底思われない。それでも最近あまり書いていないし、新しいことを書くのもなんなのでお受けすることになった。

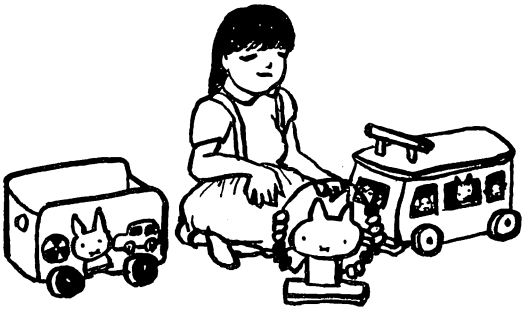
私の卒論のタイトルは「ボランティアセンターの機能と民間・社協・行政の役割分担」という妙に長いものである。テーマが二転三転してもう〆切まで後がないという時にやっと決まった。それでもわが学部で初のワープロによる卒論であったということだけは、どうでも良いことだが偉いような気がする。内容よりも見た目で勝負するという魂胆は今も変わらないのである。

さて、5年前を思い起こしてみると、実にボランティアがもてはやされた時期だったように思われる。あべのボランティア・ビューローができたのもその頃であったが、ボラントピア計画が打ち出されて、いわゆる行政によるボランティアの育成が一層活発になってきた。それに対する疑問や反発がこのタイトルのもとになっているが、それでもそれを全面的には否定しないあたりが、今の仕事をしている所以かも知れない。

そういえば、たまたま資料をもらいにいった大阪ボランティア協会で、これもたまたまこのタイトルを見られた当時の事務局長の岡本栄一先生に「民間・社協・行政の役割分担ではなくて、今はせめぎあいなんだ」と言われたことが思い出となっている。

五年間にボランティア活動をとりまく状況もいろいろ変わってきた。それらを見直しながらもう一度勉強させていただこうと思う。格調高くという編集者どのの言いつけなので、「である」調で書くことにした。どうなるものか不安だが、おつきあいのほどよろしくお願いします。

原田　仁



＃感謝します＃

カンパ・冊子・封筒・カセットテープ・車イス等、ご協力ありがとうございました。お礼を申し上げます。

四月のカンパ　金一六〇〇〇円

井上憲一、岡田　裕、斉藤孝文、山梨徳治、匿名三名様。（敬称略）

オープンであること

不思議なことだが、人と対面していると、その人がオープンな人かそれとも壁をつくっている人なのか、すぐにでもわかってしまう。オープンな人には話しやすいし、壁をつくっている人には気まずさを感じる。

しかし、オープンになるということは、なかなか難しいことである。その理由には、いくつかあるだろうが、ひとつは「オープン」であるという意味がわかっていないことであり、もうひとつは、わかっていても恐くてできないということだろう。

オープンであるということは「あけっぱなし」の性格だということではない。思ったことをなんでも口に出してしまうといった不注意な態度をいうのではない。自分のことを何でもベラベラしゃべるという人がむしろオープンではないこともある。多弁によって相手との壁をつくることだってできるからだ。

プライベートなことや、自分の秘密を意味もなく漏らす人のことをオープンな人だと、ぼくたちは思わない。人に対してオープンになりきれず、本当の親密な人間関係を築けないために、個人的な秘密の交換によって人間関係をつくっていこうとする。しかし概してそういう人間関係は太陽の強い光の下では枯れてしまう弱い植物のようなものだ。

オープンというと内側からあふれてくる明るい光をまず連想するのだが、じつはそれだけではなく外気の風を豊かに受け入れる開かれた窓でもあるのだ。窓の外から、ソファーのうえでアクビをしている子猫の姿やテーブルの上に忘れられたままの野草の花束が見え、レースのカーテンが風に揺れてときおり視界をさえぎるものの、それでも庭先で声をかければ子猫が首をあげて応えるような、そんな近い感覚なのである。

オープンな人の前にくるとそういう「近い感じ」がある。声をかけるとその人の内側にまで届くようだ。そして言葉はなくとも、平和な落ちついた人柄が、欺きや不信から免れた日常が、やわらかな身体の動きと声の響きとによって自然と、こちらにも伝わってくるのである。

壁のある人はそうではない。顔で笑っていても信用できないという印象がある。いつまで話していてもどういう人なのかわからない。年齢とか職場とか住んでいる場所がわかっても、いま何を考えてどんなふうに感じながら、こちらを見ているのか空虚な視線のむこう側が不明なのである。

「自分では壁をつくっていないつもりだ」と言いながら、壁をつくってし

まっている。顔に貼りついた仮面のように、壁は身体の一部になってしまっているのかもしれない。壁をつくらなければ脅かされる生活が長く続いたのだろうか。

オープンになれないのは、人を恐れているからだ。世界が、気を許せば何をするのかわからないような悪意に満ちたように、その人の目には映るのだろう。

対話の最中でも、何を言うべきか何を言わないべきかをたえず考え、考えすぎているから、無表情な言葉しかでてこない。自分に注意を向け過ぎているから、相手に送る言葉も浮かばないし受けとった言葉にも心が響かない。

オープンになれる人は、人を信じているのだろう。根本的に人間に対して楽天的なのだろう。たとえ目の前の人に否定されても、その日常は自分の人間としての価値を確信させてくれるような豊かな愛情に囲まれているのだろう。

彼は概して信じやすい人であるが、それは人間に対して無知であることを意味するのではなく、人は周囲から信じられているとおりに自分をつくり変えていくという真実を忘れてはいないのである。（知）

あっちゃんのシングルライフ

4

山本篤江

家が決まり、契約とか、区役所の手続きとか忙しい毎日がつづきました。

その時は、忙しい、ややこしい、疲れている…のも関係ないぐらいにはりきっていました。そのばたばたの中で、私の心中は自分でも不思議なぐらい複雑でした。と言うのは、やっぱり父のことでした。保証人の欄に印を押してもらって以来しばらくの間、父は私に、用事があるとき以外、口を開こうとしてくれませんでした。その時のいたたまれなかった気持ちは、今考えてももう〃いや〃です。

この状態が長く続くようだったら、家を出るのをやめよう。でも、こんなことでめげていては、ここまでの自分のやってきたことが全く無駄になってしまう。でも、自分はすご〜く悪いことをしているんではないか、自分ほど親不孝な者はいないのでは（言いたいことをいって欲しい、その方が気が楽になるのに）と考えました。でも、負けてはいけない、時間が解決してくれるかもしれない、もう少しの辛抱なんだ。と、自分に言い聞かせながら十日余りを過していました。

たった十日なのに、今迄になかった十日間でした。次回は、その父の変り様を聞いてください。

美智子のこんな話

岸田　美智子

大阪市の全身性障害者介護人派遣事業が施設障害者にも適用されますよ！！！

一九九一年五月から大阪市の全身性障害者介護人派遣事業が、大阪市内から措置された施設障害者にも、やっと適用されるようになりました。

今まで施設障害者は、「介護はすべて施設に対する措置費の枠組みで保障できている」という理由で対象外とされていました。

でも、私達のやってきた「施設の障害者外出サービスネットワーク」（以下「外出サービス」と略）などの地道な活動の結果、施設障害者は外出できていないという実態が明らかになり、まだまだ不十分な形ですが、ようやく行政にもこの制度の施設障害者への適用を、認めてもらえる事になりました。

この制度は、もともと在宅の一級の身体障害者を対象に始められました。在宅の場合、その時間給や時間数も年々上がり、この四月からは、毎月最大で一一九五円X一〇五時間＝十二万五四七五円まで介護料として介護者（家族以外）に支給されます。

でも、介護者は障害者が自分で捜さねばならず、施設障害者も友達などいないので、在宅障害者と同じように実際には、まだまだ使いにくい制度なのです。

介護内容は、在宅の場合、生活介助と外出介助のどちらでも良いのですが、施設障害者については外出介助のみとなります。そして、時間数についても施設障害者は、月三五時間までとなっていますので、毎月最大一一九五円X三五時間＝四万一八二五円までとなります。

介助者が見付かれば、三五時間という少ない時間数を使い切って、外へ出たい施設障害者の方ばかりかも知れませんが、現実は残念ながら殆ど介助者がいないのです。そんな現実を外出サービスでは、みんなの力で変えて行きたいと思いますので、この介護料を外出サービスにプールしていき、外出基金としていく事になりました。

一人でも多くの施設障害者が、この制度を利用できるようにしていきましょう…！

これを読まれたご感想やご意見、または

この制度などについて、何かお知りになりたい事がありましたら、いつでも、左記の連絡先まで、どんどんご連絡ください。お待ちしていま～～～す。

〒五五八　大阪市住吉区我孫子西一－一四－一一〇。木下マンション一号古田方

「施設の障害者外出サービスネットワーク」

担当：岸田・古田まで

TEL〇六－六〇七－八二六〇（留守番電話有り・FAXも同じ番号）

郵便振替：大阪六－一一三三二六

外出サービス

∞サロン・あべの紙の朗読テープが出来ました∞

「阿倍野区ボランティア連絡協議会」の朗読グループのご協力により、サロン・あべの紙の録音テープを作っていただいています。バックナンバーは三九号から、五八号の分があります。五〇号は五周年記念紙になっており九〇分と六〇分の二本のテープに収録されています。サロン紙朗読テープご希望の方は、冨田までお申し出下さい。

（TEL06-691-1028）

おしらせ

六月の出会い

日時　平成三年　六月十五日（土）

午後一時～四時

場所　育徳コミュニティーセンター

二階研修室（スロープ・車イストイレ有り）［大阪市阿倍野区阪南町五－十五－二八］

内容　「自助具の部屋」

パネラー　酒井佐和子氏

中島博氏

会費　なし。

問い合わせ　TEL・06-691-1028（冨田慶子）

走ろう歌おう大運動会

参加者大募集

障害者と健常者の交流と友好を深める大運動会が次の要領で開かれます。皆さん、お誘い合せの上多数ご参加下さい。

記

日時；６月２日（日）午前９時より

場所；都島小学校

（地下鉄都島駅すぐ）

参加費；大人８００円

小人４００円

申し込み先；乾　純一

伊丹市南本町1-2-27

TEL.0727-72-1505.

一九九一年六月十五日発行（毎日発行）KSKP通巻一六五八号一九八四年八月二〇日第三種郵便認可
発行人＝関西障害者定期刊行物協会＝大阪市城東区中浜2－10－13緑橋ハイツ2F・アド企画気付

<サロン・あべの>第５９号　編集：サロン・あべの　運営委員会　定価 100円
（〒545 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６．電話０６－６９１－１０２８冨田慶子）
印刷；セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町２－２－１０－１０１．TEL.06-691-2365.